

# 山城



# 超える

## ⑤ 大舞台直前、初の骨折

### 空手世界選手権金メダルの同志社大・山下紗葵さん(22)

投げ技を掛けられ、体が浮いた。着地しようとした左足つま先に激痛が走った。

昨年9月中旬、大阪市内の道場。世界選手権に向けた練習のさなか、同志社大空手道部の4年山下紗葵さん(22)は左足の中指と薬指の付け根を骨折した。6歳で空手を始め、けがをしたのは初めて。「このままでは戦えない」。暗雲が垂れ込めた。

女子団体形の日本代表。道場で知り合った森岡実久さん(26)は兵庫県川西市と、大学の先輩の大野ひかるさん(24)は大阪府を誘ってチームを組み、初の日本代表に選ばれた。「3人で世界一になる」。大きな夢に手が届こうとしたそのとき、経験したことのないアクシデントが襲った。

団体の形は、3人が約5分半の演武で突きや蹴りなどの技を披露し、相手に技を仕掛けたり投げ合ったりする実戦さながらの連続技も繰り出す。山下さんのけがは、骨をつなぐ仮骨ができるまで1カ月、完治は3カ月。1カ月半後の大会参加は厳しい状況だった。

ナショナルチームの監督から「ゆっくり休め」と言われ、強化合宿は不参加。「一緒に練習ができない。申し訳ない」と落ち込んだ。

しかし、2人は普段通り大きな声で練習を続けていた。「ときはきとして明るく、おしゃべりな大阪のオカン」のような森岡さんと、「マイペースだけど、こそと」といふときは頼りになる姉のような大野さん。

## 前を向いて 励まし力に

2人は「たくさん練習をしてきたから大丈夫」と励ましてくれた。練習を見つめる山下さんに2人は「細かなところまで遠慮なく言ってくれ」と演武の改善点を探すよう求めた。「勝つために前を向いて」と言われた気がした。今の自分にできることをやろうと気持ちを切り替え、2人の演武に自分を重ねるイメージトレーニングを続けた。

骨折が完治しないまま、オーストラリアでの世界選手権に出場。空手ができる喜びが痛みを忘れさせ、準決勝まで勝ち進む。相手は強豪イタリア。先に演武したイタリアを「うまい」と思ったが「森岡さんと大野さんの方が上」と気持ちを奮い立たせ、3-2の判定で勝利した。

欧州王者スペインとの決勝では、2人の練習を見ながらイメージしていた通りに体が動いた。裏返し蹴り、足払い、跳び蹴りの連続技も決めた。後続のスペインは動きが硬く、5-0の圧勝。女子団体の形で日本チームとして2大会ぶりの金メダルを勝ち取った。

表彰台で2人から「良かったね」と声を掛けられ、言葉に詰まった。くじけそうだった自分を温かく見守ってくれたことを思い出し、涙が止まらなかった。

次の目標は、高校教員になり、指導者として2020年の東京五輪に選手を送り出すこと。

「森岡さんと大野さんが温かく見守って、けがを乗り越えさせてくれたように、次は私が後輩たちを支えたい」(山本秀二)



空手の世界選手権女子団体形で優勝し、表彰台でトロフィーを掲げる(右から)山下さん、森岡さん、大野さん—昨年10月30日・オーストラリア・リンツ 「空手道マガジンJ K F a n」提供